

Title	汎スラブ主義と露土戦争：大改革後ロシアの保守的ジャーナリズムにおけるナショナリズムの諸相
Author(s)	竹中, 浩
Citation	阪大法学. 2009, 59(3,4), p. 155-178
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55193
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

汎スラヴ主義と露土戦争

——大改革後ロシアの保守的ジャーナリズムにおける

ナシヨナリズムの諸相——

Ⅰ はじめに

竹 中 浩

一九六〇年代末は、ソ連邦において、一九世紀中葉の思想集団であるスラヴ派に関心が集まった時期である。ホミャコフ、キレーエフスキー、アクサーコフ兄弟といった人々につき、従来の硬直したイデオロギーの評価を批判して、リベラルな改革を目指す思想運動として捉える評価が現れ、論争を惹起し、結局は肯定的な評価が定着した。⁽¹⁾ もちろんスラヴ派に対する積極的な評価が直ちに保守主義一般に対する肯定的評価に結びついたわけではない。それでも、七〇年代末になると、スラヴ派以外の保守主義者にもまた分析の光が当てられることになった。画期的であったのは一九七八年に出たトヴァルドフスカヤのカトコフ論である。そこには政治思想を見るさいに本来あるべき矛盾への注目が示されていた。⁽²⁾ 翌七九年、露土戦争一〇〇年を記念して刊行された書物では、汎スラヴ主義者の活動もまたセルビア人やブルガリア人の民族解放運動を支援しようという自発的かつ汎汎な社会運動の一部として評価された。⁽³⁾ 二〇年の後、ソ連邦の終焉とともに歴史評価に対するイデオロギー的な制約がなくなると、それ

まで傍流の扱いを受けてきたロシア思想に対する関心が一挙に高まる。九〇年代の自由主義論の流行に続いて、二〇〇〇年代の初めには多くの保守思想家に注目が集まり、ソ連邦の時代には想像もできなかった思想家の著作集が刊行されるようになった。⁽⁴⁾

保守思想に対する評価はナショナリズムに対する見方に深く関わっている。帝政期のロシア・ナショナリズムは対外態度と国内問題の双方にまたがる現象であり、その現れ方は時代ごとの条件に左右される。六〇年代のカフカース・中央アジア征服、七〇年代後半のバルカン問題と汎スラヴ主義、八〇年代の「ロシア化」、九〇年代の極東進出といった出来事のそれぞれにおいて、その現れ方は自ずと異なる。もとよりその根底には、国家的一体性の正当化とナショナル・アイデンティティの明確化という、近代国民国家に共通する課題があるはずである。その観点から多様な歴史的事件をめぐる議論をつなぐ糸を見出すことは不可能ではないであろう。しかし、そのためにはそれぞれの時期においてナショナリズムに基づく言論が果たした役割についての理解をより精密化しなければならない。本稿ではロシア社会にナショナリズムを鼓舞したいわゆる保守的言論人に注目し、露土戦争の時期を中心に、その言論活動に現れた思想的立場について検討する。それによってナショナリズムの問題をより歴史的かつ統一的に論じることが可能になると考えるからである。

言論を展開する人たちは言葉の力によって何かをなそうとする。その中心にあるのは広義の思想の伝達である。もちろん、彼らはいわゆる思想とは関係の薄いこと、たとえば新聞や雑誌の編集者であれば購読者の数に無関心でいるわけにはいかない。しかし、言論の道を志す人であれば、それだけに関心を集中することはない。購読者の増加も、思想を効果的に伝達し現実化するための手段という側面をもつであろう。時代の現実には彼らの行動に一定の枠を設ける。言論で生きる人々はその枠内で社会に働きかけ、制約との相互作用のなかで言葉によって何かしら意

味のあることを実現しようとする。ここで言論活動と呼ぶのはそのような営みである。

政治思想史研究の基本概念は欧米の歴史的経験から抽象されている。「保守的」とか「ナショナリズム」とかの概念についても欧米の経験に基づく議論の蓄積があり、それとの比較で精密な議論が可能になるはずである。しかし、欧米ではロシアの保守主義に対する否定的な評価が定着しているためか、彼らの思想を比較可能なものとして捉え、真剣な検討の対象とする研究は今日では必ずしも多くない。⁽⁵⁾ 逆に愛国思想への共感が見られる昨今のロシアでは、保守的言論人に対してしばしば十分な分析なしに高い評価が与えられることがある。日本の政治思想史研究はどちらの立場から距離をとることが比較的容易であり、それゆえ保守的言論人に対するバランスのとれた見方をかたचितづくるうえで少なからぬ貢献が可能であると考えられる。

露土戦争とナショナリズムの関わりに関しては、日本では高田和夫の研究が重要である。⁽⁶⁾ 高田は活字メディアの発達と言論の影響が及ぶ範囲の広がり注目し、バルカンをめぐるロシア社会の動きを社会史的な視角から捉えようとした。しかし、高田は情報伝達の仕組みの確立を議論の中心に据えるため、あえて政治的な座標軸を度外視して考える。ロシア社会に影響を与えた言論の内部にある微妙な色合いの違いには目をつぶり、それぞれの問題をめぐってあらわれてくる複雑な思想の諸問題を、自明の存在としての大ロシア・ナショナリズムの異なった発現形態として一括している。⁽⁷⁾ そのような大きな括り方によって見えてくるものももちろんあるであろう。しかし、零れ落ちるものも少なくないように思われる。本稿では、この時代の思想状況と深く関わる問題群の整理を通じて、議論の肌理をもう少し細かくしたいと考えている。

II ロシア・ナショナリズムにおける宗教と軍事

通常保守的ジャーナリズムとして括られるものの中には二つのタイプがある。ひとつは過激な右派の刊行物である。部数は少ないが、発行者自身が裕福である場合も多く、政府と検閲との衝突をそれほど恐れない。一八七二年からメシチュルスキー V. P. Meshcherskii (一八三九—一九一四年) が発行し、一時ドストエフスキーも編集者を務めた『市民 Grazhdanin』がその典型である。さらに六〇年代におけるトルキスタン征服の立役者であるチュルニャエフ M. G. Cherniaev (一八二六—一九八年) が編集・発行した『ロシア世界 *Russkii mir*』も外すことはできない⁽⁸⁾。この新聞は、一八七一年、それまでの『ヴェスチ Vest』に代わり、極端な貴族特権維持の主張を展開するメディアとして登場した。

これらとは別に、思想的・政治的な一貫性と並んで、あるいはそれ以上に、より広汎な読者にアピールすることを目指す定期刊行物がある。このタイプの刊行物を編集するためには大衆相手に時代の流れを読む力が求められる。そのような能力に恵まれ、広汎な読者の獲得に成功した保守的言論人の代表が、『モスクワ報知 *Moskovskie vedomosti*』を通じて大改革後のモスクワを拠点に巨大な政治的影響力をもったカトコフであり、世紀転換期としては非常に多くの読者を獲得した新聞『新時代 *Novoe vremia*』の発行者スヴォーリン A. S. Suvorin (一八三四—一九一二年) である。このふたりは、ともに緊迫し高揚した時代の雰囲気なかでリベラルからナショナリストへと立場を変えた言論人とみなされている⁽⁹⁾。

もともとロシアは、大国であることそれ自体にアイデンティティのよりどころを求め、その国際的地位を維持するために大規模な軍事力を保持してきた。保守的な言論人もまた、ロシアが大国としての威信を保ち続けることに

強い関心を寄せることになる。しかし国家は単なる人間の集合ではない。政治的統合は文化的要素を全く抜きにしては困難である。もともと国境とは、理念とは無関係な、その意味で偶然の理由によって引かれるものであり、それによって囲まれた地域がひとつの共同体として意識されるためには、それに広義の文化的な意味づけを与えなければならぬ。とくに、イタリアやドイツで統一の動きが進み、国民国家が登場し、次第にそれが国家統合のモデルと考えられるようになると、何らかの形で国家に文化的一体性を与える必要がより強く感じられるようになるのは自然なことであった。さらに進んで、国家が何らかの文化的・歴史的理念の体現者として、国境を超える価値に基づく使命を負っているという言説が用意されるならば、いっそう積極的な統合が可能になるであろう。

ナショナルな言論には、自国の国境が単なる偶然によるものでなく、その影響力拡大が単なる覇権主義ではないことを説き、国民を鼓舞し、同時に安心させることが求められる。国家に特別な価値理念や使命を付与する思想・言説によって大國意識を補充するのである。もとより大國主義と文化的・歴史的正当化の論理が常に調和するといふ保証はなく、両者が矛盾することも当然にありうる。ロシア民族の文化的純粋性を重視する立場に立ち、理念的に考えられた文化的伝統の純粋性を国家と民族にとって本質的なものとみなすならば、領土を拡張し、異質な要素を大量に国家の中に取り込むことについては消極的とならざるを得ないからである。保守的ジャーナリズムもまた、こうしたナショナルリズムの抱える矛盾を体現することになる。

帝政時代には、文化の問題は宗教、すなわちロシア帝国の国教として体制を支えるロシア正教と不可分であった。民族ごとに教会をもつことの多い東方キリスト教の世界にあって、宗教は民族意識と深く関わっていた。ロシア正教もロシア人の生活と密着し、他民族の精神に対する影響力は弱く、信仰自体がそれほど活発な伝播力をもっていないわけではない。多民族帝国であるロシア帝国の内部には、もともとさまざまな宗教的マイノリティがいた。とく

にロシア帝国は西部地域にロシア人に対する文化的優越感をもった強力な民族を抱え、それらに一部地域の事実上の支配を許していた。ポーランド人とバルト・ドイツ人がそれであり、ある意味ではユダヤ人もそのような目で見られることがあった。彼らの文化はそれぞれの宗教と分かち難く結び付いており、その存在は一九世紀後半の保守的ジャーナリズムにおいてしばしば重大な問題として取り上げられた。それはこうした民族が、集中して居住している地域において他の民族に優越し、帝国内のロシア人の支配を脅かすと考えられたからである。保守的ジャーナリズムにとって、いかにして帝国内でのこうした民族の政治的・経済的影響力を弱め、帝国政府に対する脅威を減殺するかは重大な問題であった。

一八六三年のポーランド蜂起は、西部辺境におけるポーランド人支配の問題性をあらためて認識させた。この問題ではカトコフがとりわけ厳しい態度をとり、ポーランド蜂起という大きな事件に関わるなかでリベラルな立場から国家主義的な立場への移行を果たした。カトコフによれば、問題はポーランド人の一部による陰謀であり、下層の人々を彼らの影響から切り離せばその浸透を食い止めることができるはずであった。ロシアの一部でしかないウクライナで知識人の自立運動が活発化しつつあるのもそれと無関係ではありえなかった。⁽¹⁰⁾ もともとカトコフは、儀礼等宗教の外面に関わることについては概して寛容であり、⁽¹¹⁾ 文化的多様性それ自体を問題視することはあまりなかったが、国家の政治統合に影響を与えるおそれがあると判断されたときには苛烈な批判を加えた。

これとの対比で興味深いのは、この時期、汎スラヴ主義者として名高いイワン・アクサーコフがポーランドの政治的独立を容認する発言をしていることである。⁽¹²⁾ アクサーコフにとって、ロシアとポーランド支配層の文化的相違は歴然としており、いかなる政策をもってしても、両者の共存はとうてい不可能であった。これに対してアクサーコフのユダヤ人に対する態度は厳しかった。彼はユダヤ人が搾取者であり支配者であるという考え方を次第に鮮明

にし、その文化的独自性の再生産を許容しなかった。⁽¹³⁾一九世紀後半において、ユダヤ人問題はリベラルなジャーナリズムとナショナルなジャーナリズムを分かつ重要な争点であった。

バルト海沿岸地域やフィンランドでは、優勢なルター派信徒に対して概して寛容な政策がとられていた。北方戦争によってスウェーデンから割譲されたこれらの地域は既にピョートル時代からロシア帝国の領土であり、比較的最長い統合の歴史をもっていたのである。また、大改革期のロシア外交はプロイセンとの関係維持を必要としていた。クリミア戦争の結果結ばれたパリ条約によって黒海に対する支配権を失ったロシアは、ポーランド蜂起によってその国際的立場をさらに悪くした。国際的孤立を防ぐにはプロイセンとの友好的な関係を維持するほかに選択肢をもたなかったのである。しかし、一八六〇年代後半になると状況は徐々に変化する。六六年、普墺戦争においてプロイセンが勝利し、北ドイツ連邦が結成される。さらに七〇年、普仏戦争におけるプロイセンの勝利によってドイツ帝国が成立し、英仏を中心とするヨーロッパ諸国のロシアに対する外交的圧力は減殺された。逆に、将来独露が衝突するのではないかという考えとともに、一部の軍人を中心にドイツへの警戒が生まれてきた。たとえばカフカース戦争に軍功のあったファヂェーエフ R. A. Fadeev (一八二四—一八三年) は地政学の観点からドイツが仮想敵となることを説き、露仏接近を予言した。⁽¹⁴⁾

沿バルト地域では、プロイセンの目覚ましい動きによってもたらされた空気の変化に知識人たちが敏感に反応した。ドイツ人としての意識が高まりつつあるなかで、かつて敵対していた保守的な貴族とリベラルな市民とが接近し、それぞれを代表する知識人も協力するようになった。この動きは直ちに地域の政治的独立を求めることにはつながらなかったが、それでも文化的自立を求める風潮は明らかに高まった。カトコフは沿バルト地域にプロイセンの求心力・吸引力が及ぶことを問題視し、この地域における、文化面でのドイツ化の進行が政治的自立性の強化へと

進むことを警戒した。「民族」が政治的意味をもつようになり、ドイツ人意識が高まりつつある現在、帝国内のドイツ人がこれまでと同様忠良なロシア臣民でいられるであろうか。これに対してカトコフは強い危惧を表明した。⁽¹⁵⁾

ただカトコフは帝国の中に多様な文化が存在すること自体には反対しなかった。ドイツ文化に高い価値を認めること自体がロシア帝国臣民であることと直ちに矛盾するとは、彼は考えなかった。あらゆる文化の価値は、それがどれだけ全人類的意義を有するかによって測られるのであるから、ドイツ文化を放棄する必要はなく、自ら範を示すことによって他の人々を啓蒙すればよいとした。⁽¹⁶⁾ その点で、カトコフは一八五〇年代に彼が展開した普遍主義的な文化観を持ち続けたといえることができる。⁽¹⁷⁾

一八七〇年代前半には軍のあり方に関わる論争も展開された。七四年に完成をみる陸相ミリューチンの軍制改革は、六〇年代の大改革の延長上にあり、身分制的な垣根を低くすることを意図していた。その中に平等化への志向を感じ取った、皇帝直属官房第三部長官シュヴァーローフやカフカース総督バリヤチンスキーを後ろ盾とする貴族主義的グループはこの改革に強く反対した。⁽¹⁸⁾ チェルニャーエフは、外務省や陸軍省における官僚組織に対して強い敵意をもっていた。⁽¹⁹⁾ 個々の論点につき、最も詳細な議論を展開したのはファヂューエフである。当初ファヂューエフは軍制改革に対する直截な批判は避けていたが、軍における将校団の重要性をとりわけ強調する彼の考え方が、基本的なところでミリューチンの路線と相容れないのは明らかであった。まず予備兵力の維持の仕方について意見の対立があった。戦時に動員可能な正規軍の一部として、あらかじめ専門的訓練を受けた予備役をプールしておくという陸軍省の方針に対して、ファヂューエフはカフカースの経験から伝統的な非常後備軍 *opolchenie* の考え方をとった。平時には通常の生活をしている国民が、一年に三週間ずつ、三年間の訓練を受け、最小限の銃器の扱い方を覚え、集団生活に慣れる。それによって戦時には大きな兵力が動員可能だといえるのである。⁽²⁰⁾

ファチエーエフの軍制改革批判は多岐にわたった。しかし何よりも重大な問題とされたのは、軍制改革が、ロシア精神の担い手である貴族を大衆のなかに埋没させるおそれを孕んでいることであった。ファチエーエフにとって、将校団を開かれたものにし、貴族以外の者を能力によって将校にするというのは受け入れがたい考えであった。彼はそこから大改革の原理そのものに対する根本的批判へと進み、一八七四年、それまで『ロシア世界』に寄稿した論文をまとめ、『現在と将来のロシア社会』として刊行した。これがサマーリンによって「革命的保守主義」という評価を受け、両者の論争に発展したことはよく知られている。ファチエーエフら貴族主義グループにおいては、社会の進むべき方向に対する時代錯誤的な発想が、ドイツを仮想敵とする地政学的リアリズムと共存していた。

カトコフはある程度までこのグループと立場を共有していた。とくにカトコフには、社会における有産者の指導的役割とその影響力の制度的保障という基本的な考え方があった。カトコフにとって教育はエリートのため必須条件であり、その教育は、機能本位の実務教育ではなく、ギムナジアにおける古典教育（教養教育）でなければならなかった。そこそが指導層に求められるものだったのである。このような彼のエリート主義的な立場は、貴族の役割と特権に固執する人々と共鳴し合う部分をもっていた。また、兵役によって生半可な教育を受けた農民の子弟を長く農村から切り離すことは、彼らの都市への志向を強め、プロレタリアートを増大させるという危惧は彼のものでもあり、それに基づいてカトコフは兵役期間の短縮を訴えた。⁽²⁰⁾

しかし、基本的なところでカトコフの立場は貴族主義グループとは異なっていた。事あるときに徴募される兵では近代的軍隊に必要な道徳的・知的水準に達することができない。彼にとって国民皆兵という原則は必須であり、そのために社会的なコストが生じるのは避け難いことだったのである。それゆえカトコフは、軍制改革に関して個別の論点につき反対派の議論に理解あるいは共感を示す程度で、原則的問題について旗幟を鮮明にしようとは

しなかった。シュヴァーローフに代表される貴族主義グループはそのようなカトコーフの態度に不満であった。⁽²³⁾

III 汎スラヴ主義と露土戦争

かつてスラヴという理念は西欧に対して劣位に置かれた複数のグループが共同戦線を張るために用いられた。一九世紀前半、ハプスブルク帝国のなかでドイツ人やマジヤール人の圧迫を感じていた西スラヴ知識人と、ヨーロッパ文明の中でしかるべき位置を占めたいとの欲求を強めつつあったナショナルなロシア知識人が、言語の親近性に基づくスラヴ人というアイデンティティに接点を見出したのである。もとよりそれは同床異夢であった。何よりも、初期スラヴ派のように、西欧とは異なるスラヴ的な生活様式の文化的独自性と精神的優越性に注目し、その核に正教を置こうとする人々にとって、チェコ人やスロヴァキア人が正教徒でないことは、同胞とみなすうえで重大な欠陥であった。ただ、ロシア人の地位を高めたいと願う彼らにとって、ヨーロッパにおける第三の勢力としてのスラヴ人という統合象徴は重要であり、それを維持するために、とりあえずはその欠陥に目をつぶらざるを得なかったのである。いづれにしても、言語に注目することにより、チェコ人やスロヴァキア人と同族意識をもつ根拠について理解できる人々は限られており、当初汎スラヴ主義はモスクワ大学教授ポゴチンなど狭い範囲の知識人の運動でしかなかった。

アレクサンドル二世時代に入ると、汎スラヴ主義は少しずつ性格を変え始める。クリミア戦争の敗北によってロシア国家が味わった屈辱や、イタリアやドイツの統一への気運に端的に現れた国際秩序の流動化は、国際政治の問題抜きに汎スラヴ主義を論じることの空しさを鮮明にした。⁽²⁴⁾ 西欧とは、クリミア戦争においてロシアを打ち負かし、屈辱的な条件のもとに置いた英仏であり、統一に向かいつつあるドイツであった。一八五八年に汎スラヴ主義運動

の中心であるモスクワにスラヴ慈善委員会が設立されたとき、その問題意識はもはや四〇年代と同じではありえなかったのである。さらに一八六三年のポーランド蜂起は、スラヴ人であるということのみに基づく友愛が幻想であることをはっきりと示した。

汎スラヴ主義がロシアの政治的地位を関心の中心に置く運動へと変わるにつれ、正教の比重が高まっていた。⁽²⁵⁾それとともに、トルコ人の支配からのコンスタンティノープル解放がロシアの神聖な使命であると説く主張が庶民レヴェルでも受け入れられるようになった。コンスタンティノープルは東方キリスト教世界の中心として特別な宗教的意味をもつ都市だったからである。これに比べれば、知識人の運動である汎スラヴ主義に基づく南スラヴ人への支援は新しいアイデアであり、社会の中になお十分根付いていないものであった。⁽²⁶⁾それはコンスタンティノープル解放という理念と共鳴し合うことによってはじめて力を持ちえたといつてよいであろう。

また、正教徒であることが直ちに民族相互の友好を保証するわけでは毛頭なく、民族を異にする正教徒同士が相互に敵対し合うというのはいくらもありうることであった。そもそもバルカン諸民族の独立は、トルコ人からの政治的独立だけでなくコンスタンティノープル総主教府を支配するギリシア人からの宗教的独立をも意味していた。コンスタンティノープルに近く、その総主教区に含められていたブルガリアでは、オスマン帝国のミット再編の動きのなかで、一八六〇年の復活祭でブルガリア人主教がコンスタンティノープル総主教府からの独立の意思を示した。一八七〇年、オスマン帝国のスルタン、アブデュルアジズはブルガリア総主教区の創設、すなわち独立のブルガリア正教会を承認したが、コンスタンティノープル総主教アンシモス六世はこれを認めず、一八七二年、独立した聖職者を破門した。⁽²⁷⁾ロシアの宗務院やコンスタンティノープル駐在大使のイグナーチエフ N. P. Ignatiev (一八三二—一九〇八年) はブルガリア教会を支持したが、モスクワの高位聖職者の間では意見が分かれていた。⁽²⁸⁾宗教的

には、ブルガリアの独立は必ずしもすべてのロシア人を喜ばせるものではなかったのである。

一八七五年夏、オスマン帝国領ヘルツェゴヴィナで暴動が起こった。この蜂起は急速にバルカン全域に波及し、同年秋と翌七六年春、ブルガリアで、ブルガリア人の殺戮に端を発する蜂起が起こった。もともと南スラヴ統一を呼びかけていたセルビア政府はこれに呼応し、六月、オスマン帝国に宣戦を布告する。チエルニャーエフやファチューエフはこの動きに積極的に関与しようとした。彼らはセルビア軍の指揮をとることを強く希望したが、ロシア政府は許可しなかった。²⁹ 退役したチエルニャーエフは、義勇兵を集めてセルビアに出発する。モスクワ慈善委員会の委員長で汎スラヴ主義の指導的人物のひとりであったアクサーコフはこの企図を支持し、義捐金を募った。もともとそれほどセルビア人を当てにしていなかったアクサーコフは、チエルニャーエフの企てが成功するとは考えていなかったが、それが反オスマンの世論を喚起し、ロシアの軍事介入を引き出すための呼び水になることを期待していたのである。アクサーコフにとって、スラヴ諸民族の解放は、ロシア国家のみがよくなしうるものであった。³⁰ 初期スラヴ派に見られた国家への警戒心は、彼には希薄であったということが出来る。

セルビア軍部隊を率いてオスマン帝国と戦うチエルニャーエフの行動はロシア社会の関心を強く引いた。これを報じて最も効果的に世論に訴えたのは彼自身の新聞『ロシア世界』ではなく、スヴォーリンの『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』であった。社主となって間もないスヴォーリン自身がチエルニャーエフに密着してその動きを仔細に伝えると同時に、ロシア社会の南スラヴ解放熱を煽り、それによって同紙は部数を伸ばした。スヴォーリンはもともと大改革を支持するリベラルとしての性格が強かったが、これを機にナショナリストとしての色彩を色濃く出すようになった。彼は自由主義的な『ゴロス』など、対立する他の新聞雑誌による攻撃に対してチエルニャーエフを熱烈に擁護した。³¹

もっとも、ロシアの世論が沸騰し、南スラヴ支援の熱気が社会を覆うようになると、政府に批判的な雑誌も抑圧的なオスマン帝国の支配に対する南スラヴの「解放闘争」を支援し、義捐金の拠出を呼びかけるようになっていた。社会がはじめて自分たちの力を自覚し、高揚感に浸りつつ、これまで上から与えられていた愛国的象徴を使って政府を煽っているという事態は、リベラルなジャーナリズムにとっても、社会の活性化とその積極的な役割の拡大という基本思想に適合するものであったし、アジア的なイスラム支配を敵視することにも抵抗はなかったのである。左派を除けば、ナロードニキ的なジャーナリズムも南スラヴ解放を支持していた。⁽³³⁾

政府のなかでは、一八六〇年の北京条約締結の立役者であり、汎スラヴ主義的な志向をもつ外交官イグナーチエフが、コンスタンティノープルにあつて反オスマンの気運を高めるために画策していた。帝室においても、皇后や皇太子は主戦派であつた。ポベドノスツェフも汎スラヴ主義的な気分の影響を受けずにはいらなかった。⁽³⁴⁾ これに対して、アレクサンドル二世や軍政府首脳、なかでもゴルチャコフ外相やミリューチン陸相はオスマン帝国と事を構えてまでブルガリアを救援することに反対であつた。ロシアの積極的な行動がヨーロッパにおいてロシアに対する敵意を亢進させることを恐れたのである。⁽³⁵⁾

それにもかかわらず、一八七七年四月、ついにロシアはオスマン帝国に対して宣戦を布告し、バルカン経由でコンスタンティノープルに向かって進軍を開始した。困難をきわめたブレヴナ要塞攻略も、「白の將軍」の異名をとったスコベレフ M. D. Slobel'ev (一八四三―一八二二年) によって成し遂げられた。しかし、イギリスは、ロシアがコンスタンティノープルを占領した場合には参戦するとの警告を発し、地中海艦隊を黒海に入れる態勢をとった。⁽³⁶⁾ ロシアはコンスタンティノープルに迫りながら休戦協定を締結し、サンステファノ条約を結んだ。この条約に基づくブルガリア自治公国の成立に対してもイギリスは強く反対し、結局ロシアはビスマルクの仲介により七八年六月

から翌月にかけて開かれたベルリン会議で譲歩を余儀なくされた。

世論にとってバルカンはなお重要な意味を持っていた。アクサーコフも、ブルガリアへの期待と関心を示し続けた。しかし、一八八三年の外交危機とともに、ブルガリアとロシアの関係は悪化していった。領土的欲求を満たされなかったセルビアも戦後の体制に対して強い不満をもち、一八八五年、ブルガリアがベルリン条約で失った東ルメリアを再統合すると、オーストリア・ハンガリーの援助を受けたセルビアがブルガリアに侵攻する。汎スラヴ主義者が期待したスラヴ諸民族間の連帯などというのが一時の幻想に過ぎないことは明らかであった。⁽³⁷⁾ 多くの人々は早くからスラヴ解放という理念に対する興味を失っていた。⁽³⁸⁾

戦時の汎スラヴ的情熱が冷めていく一方で、ベルリン会議以後、オーストリアがバルカンに対する影響力を強めたことは、ロシアのこの国に対する感情を著しく悪化させた。アクサーコフのような信念をもった汎スラヴ主義者がオーストリアを敵視したことはいうまでもない。⁽³⁹⁾ ポベドノスツェフの場合も、ガリツィアに住むルテニア人のウニャトの処遇をめぐる対立するオーストリアに対する感情は好ましいものではなかった。⁽⁴⁰⁾ オーストリアへの敵意は、ビスマルクの提案により一八八一年に結ばれ、八四年に更新される三帝同盟に向けられた。ポベドノスツェフはこの同盟に反対であり、一八八七年一月には、アレクサンドル三世も更新に反対した。カトコフは、イギリスをロシアの主敵とみなし三帝同盟を維持しようとするギールス外相を攻撃するとともに、フランスとの防衛同盟の締結を説き、三月八日の論文で、秘密にされていた三帝同盟の存在を明かすという大胆な行動をとった。結局三帝同盟は更新されず、代って六月、ドイツとの間に再保障条約が結ばれた。⁽⁴²⁾

アレクサンドル三世時代、ロシアとの具体的な利害対立が深刻であったのは、アフガニスタンを保護国化し、中央アジアにおいてロシアとの間で「グレートゲーム」を繰り広げ、政府と世論のなかに根強いルソフオビアのある

イギリスであった。しかし、アジアをめぐる対英関係の諸問題は、一般の人々から遠いところで、軍人や外交官など、玄人によって処理される事柄でしかなかった。指導層も含め、世論にはアジアへの直接の関心は希薄であり、イギリスに対する敵意の強さは、バルカンをめぐる対立するオーストリアへのそれには遠く及ばなかった。具体的な国益をめぐる競争者と、論壇で関心を集める仮想敵との間には、顕著な食い違いがあったのである。

IV アレクサンドル三世の時代

ベルリン会議の後、会議の結果に失望したアクサーコフは政府当局を激しく批判した。政府の反応は予想以上に厳しく、一八七八年七月、彼はモスクワを追放され、モスクワのスラヴ慈善委員会も閉鎖された。⁽⁴³⁾これはいわゆる汎スラヴ主義運動の終焉を象徴する出来事であった。しかし、社会の高揚した気分はそう簡単には収まらず、これを背景として要人テロが頻発した。その頂点をなした一八八一年三月のアレクサンドル二世暗殺によって、専制の軌道修正を試みたロリスメリコフの改革は実りのないままに終わり、これに代わって、一八八二年、社会の動揺と混乱を收拾するために、ロシア固有の代表制としてのゼムスキー・ソボルを復活させようという動きが現れる。アクサーコフをはじめ、汎スラヴ主義を唱えた人々の多くがそれを推進した。かつて駐コンスタンティノープル大使として汎スラヴ主義のために活動し、今や内相となったイグナチエフは、アレクサンドル三世の賛同も得て、彼の戴冠式が行われる一八八三年五月にゼムスキー・ソボルを開催しようと企図していた。⁽⁴⁴⁾

ファヂェーエフら貴族主義勢力もこれに加わった。⁽⁴⁵⁾ゼムスキー・ソボルに対する彼らの支持は、汎スラヴ主義運動への肩入れと共通した面をもっていた。ロシアがカフカースや中央アジアを征服したさい、正当化のための大義名分は、野蛮なムスリムを啓蒙し、奴隷制の廃止など、アジア地域に文明を持ち込もうというものであり、基本

的に他のヨーロッパ諸国の場合と同じであった。⁽⁴⁶⁾ 世論の支持はあったものの、それは軍人を鼓舞するほどのものではなかったのである。⁽⁴⁷⁾ 露土戦争はこれとは全く事情が異なっており、高揚した世論の後押しを受けて戦うことの満足感を貴族主義的な軍人たちに与えた。この経験が彼らを心理的に庶民に近づけたとしても不思議はないであろう。

ゼムストヴォ活動の定着とともに、貴族主義勢力も、身分的特権を直截に主張するのではなく、ゼムストヴォの名で反官僚主義の主張を展開するようになっていた。ゼムストヴォに対し、農民に対する貴族の影響力行使を可能にするものとして肯定的な評価を与えるようになっていたのである。⁽⁴⁸⁾ ゼムスキー・ソポールはその延長線上にあるものであった。ファヂェーエフは『ロシアの現状についての書簡』を書いて官僚主義 (chinovizm) 批判を展開し、それに対する対策としてゼムスキー・ソポールを説いた。⁽⁴⁹⁾ プレヴナ攻略の英雄にしてトゥルクメン人平定の功労者でありながらアレクサンドル三世に疎んじられ、露骨な反ドイツ的言動で物議を醸していたスコーベレフも、ゼムスキー・ソポールの主張に共感を表明していた。⁽⁵⁰⁾

汎スラヴ主義運動と同様、ゼムスキー・ソポール論もロシアの文化的独自性へのこだわりの現れであり、ロシアを単なる大国以上のものにしてしようとして言論人たちが見た最後の夢であった。この夢が実現することなく終わったあとに、乾いた軍事的・行政的現実主義に基づく時代が始まる。⁽⁵¹⁾ 改革の立法者であるドミトリー・トルストイはもとより、改革を思想的に主導することになるカトコフやポベドノスツェフもまた夢を見る人々ではなかった。たしかに露土戦争に際して汎スラヴ主義的気運が高まったときには、カトコフもポベドノスツェフもそれに同調した。しかし八〇年代、アクサーコフがゼムスキー・ソポールに対する期待を表明したとき、カトコフはこれを嘲笑した。ロシア独自の文化や伝統への愛着という志向は彼には希薄であり、大改革の時代に代表制導入に共感を示したカトコフは、アレクサンドル三世の時代にはもはやゼムスキー・ソポールに名を借りた政治体制の変更が

権力基盤の強化と秩序の安定に寄与するなどとは信じていなかった。⁽⁵²⁾

露土戦争の経験は、反改革のもうひとりのイデオログとされるポベドノスツェフの政治的態度にも大きな影響を及ぼした。これによってポベドノスツェフは、社会が政府のコントロールできない熱狂に巻き込まれることの危険を認識し、以後戦争を忌避した。⁽⁵³⁾ その一方で、彼は正教に基づく宗教的統一と信教国家の維持に固執し、国内の宗教的少数者への抑圧を強めた。⁽⁵⁴⁾ 八〇年代の東部辺境におけるいわゆる「ロシア化」政策は彼を主たる推進者とす。彼にとって宗教の目的は社会の動員ではなく、国家体制を堅固にすることであった。

ゼムスキー・ソボル支持派とも、カトコフやポベドノスツェフとも異なったスタイルでアレクサンドル三世の時代を生き延び、力を蓄えていったのがスヴォーリンである。⁽⁵⁵⁾ 国有地農民の子として生まれたスヴォーリンは、カトコフやポベドノスツェフのような高踏的知識人ではなかった。彼はテロルに対しては厳しい姿勢を崩さなかったが、警察的手段による事態収拾を支持する『モスクワ報知』とは異なって、ゼムストヴォや自由な言論の積極的役割を認めており、カトコフの厳格な古典教育一本槍に対して広汎な人々に開かれた自由な教育を主張した。⁽⁵⁶⁾ イグナーチエフ内相がゼムスキー・ソボル開催の準備を進めていたときには、ゼムスキー・ソボルが太古からの民族的理念の実現であるとしてこれを支持した。⁽⁵⁷⁾ スヴォーリンはカトコフとは明らかに肌合いの異なる人物だったのであり、両者の関係は決してよくなかった。⁽⁵⁸⁾ スヴォーリンのナショナリズムは、カトコフのそのようなエリート臭や乾いた普遍主義とは無縁であり、庶民の反ユダヤ主義的心情に訴えることもためらわなかった。⁽⁵⁹⁾ 一八八七年七月のカトコフの死後、スヴォーリンはロシアで最も影響力の大きなジャーナリストになった。⁽⁶⁰⁾

V おわりに

露土戦争は汎スラヴ主義的信念が世論の支持を得、社会的高揚を作り出すことによって起こった。しかし、ロシア・ナショナリズムの歴史において、スラヴという理念が常に力をもっていたわけでもなければ、スラヴ諸民族とロシアが常により関係にあったわけでもない。スラヴ人の政治活動家は、他の勢力に対抗する必要があるときにはスラヴの理念に訴えてロシアとの結びつきを利用しようとしたが、ロシアの存在が疎ましくなったときには簡単にそれを忘れた。ロシアにとっても事情は似たようなものであった。ロシア外交にとってバルカンがもつ重要性はなくならなかったが、七〇年代末の汎スラヴ的熱狂は長くは続かなかった。

それでも、その意義を過小に評価するわけにはいかない。一九世紀半ば、ロシア帝国がカフカースや中央アジアへと版図を拡大したときには、国民国家に不可欠の文化的一体性という要件は自覚されていなかった。拡大の理由は国家の威信と文明の伝播だけで十分であった。文化への関心の高まりのなかで現れてきた汎スラヴ主義は、ロシアの新しいアイデンティティの形成に寄与すると同時に、ヨーロッパの中の多元性、西欧の相対化に注目することにより、アジアに対するロシアの眼差しにも影響を及ぼした。それはまた社会の活性化とその声の中央への伝達を求める意見とも共鳴するものをもっていた。

もとより、汎スラヴ主義に惹かれる度合いは人によって異なっており、それとロシア・ナショナリズム一般を同一視することはできない。エリート主義の立場から迫りくる平準化の流れに対応するために、歴史や文化、伝統への湿潤なこだわりから距離をとり、国家という枠そのものの強固な維持を何よりも重視したカトコフ、信教国家からの離脱という時代の趨勢に抗し、正教による帝国の統合をあくまで守ろうとしたポベドノスツェフは、その流

れとは一線を画する人たちであり、アレクサンドル三世の治世は彼らが力をもった時代であった。それでも、彼らをも含め、露土戦争以降、反オーストリア的な気分は社会のなかに定着した。

次に来るニコライ二世の時代には、社会のなかで七〇年代の対外的積極主義がよみがえる。ニコライの治世が始まった一八九四年は、日清戦争が起こり、ロシアの極東観の中心にあった清を打ち破って、日本が東アジア史の舞台上に登場する年である。ロシア帝国は、もはやバルカンのみに目を向けるわけにはいかなくなっていた。この時代、スヴォーリンは政府内の路線対立に深く関わり、一貫して膨張主義的な主張を展開した。⁽⁶¹⁾ 彼にとつて、スコーベレフやチェルニャーエフは英雄であった。露土戦争によって表舞台に出たスヴォーリンは、その記憶を最後まで持続けた言論人であったということができよう。⁽⁶²⁾

- (1) 先駆的なモノグラフとして、N. I. Tsimbaev, *I. S. Aksakov v obshchestvennoi zhizni porfornennoi Rossii* (Moscow, 1978) がある。
- (2) 例として V. A. Tvardovskaia, *Ideologia porfornenogo samoderzavniia*. M. N. Katkov i ego izdaniia (Moscow, 1978), p. 170.
- (3) L. I. Narochnitskaia, *Rossia i natsional'no-osvoboditel'noe dvizhenie na Balkanakh 1875-1878 gg.* (Moscow, 1979), pp. 22-23.
- (4) 刊行された著作集はいささち挙げない。研究書としては V. Ia. Grosul (ed.), *Russkii konservatizm XIX stoletia: Ideologia i praktika* (Moscow, 2000) や I. A. Khristoforov, «Aristokraticheskaia» oppozitsiia Velikim reformam. *Konets 1850-ssredina 1870-kh gg.* (Moscow, 2002) が重要である。
- (5) 代表的な研究は一九五〇年代から七〇年代にかけて刊行されてくる。Nicholas V. Riasanovsky, *Russia and the West in the Teaching of the Slavophiles: a Study of Romantic Ideology* (Cambridge, Mass., 1952); ditto, *Nicholas I and*

- Official Nationality in Russia, 1825-1855* (Berkeley and Los Angeles, California, 1959); Edward C. Thaden, *Conservative Nationalism in Nineteenth-Century Russia* (Seattle, 1964); Robert F. Byrnes, *Pobedomostev: His Life and Thought* (Bloomington and London, 1968); Andrzej Walicki, *The Slavophile Controversy: History of a Conservative Utopia in Nineteenth-Century Russian Thought* (Oxford, 1975). 西側では露土戦争に対する評論を概して厳しく。Michael T. Florinsky, *Russia: A History and an Interpretation*, vol. 2 (New York, New York, 1953), pp. 989, 1028 を参照。
- (6) 高田和夫「露土戦争とロシヤ・ナシヨナリズム」『法政研究』第六八巻第三号(平成十三年二月二十六日)七〇七—七二七頁。
- (7) 竹中浩「高田和夫著『近代ロシア社会史研究』『ユーラシア研究』第三十号(二〇〇四年一月)七三頁。
- (8) フォグチェーエフは『市民』と彼が『ロシア世界』で展開した議論の近さを指摘している。R. A. Fadeev, *Sobranie sochinenii*, vol. 3 (St. Petersburg, 1889), pp. 211-213 を参照。
- (9) うむぬる転回時代のスマッカーリンの活動について、Effe Ambler, *Russian Journalism and Politics: The Career of Aleksii S. Suvorin, 1861-1881* (Detroit, Michigan, 1972) を註記。
- (10) M. N. Katkov, *Imperii i krumola* (Moscow, 2007), pp. 44-45.
- (11) *Ibid.*, pp. 64-66; M. N. Katkov, *Imperiskoe slovo* (Moscow, 2002), pp. 218-219.
- (12) Stephen Lukashевич, *Ivan Aksakov, 1823-1886: A Study in Russian Thought and Politics* (Cambridge, Mass., 1965), pp. 85-86.
- (13) *Ibid.*, pp. 96-98, 109.
- (14) E. F. Morozov, S. M. Sergeev, "Opozdavshii Potemkin," in R. A. Fadeev, *Kavkazskaya vojna* (Moscow, 2003), p. 25.
- (15) Katkov, *Imperii i krumola*, pp.118-119.
- (16) *Ibid.*, pp.120-122.
- (17) たとえば『*Ibid.*』, p. 147. 竹中浩「ロシア自由主義の形成過程——『大改革』における社会認識と制度論——」『国家学会雑誌』第九九巻第五・六号(一九八六年)三四一、三四五、三四七頁も参照。

- (18) シェウナーロフやファチエーエフの人となりや思考様式について、Khristoforov, op. cit., pp. 283-284を参照。
- (19) F. A. Brokgauz, I. A. Efron, *Ensklopedicheski slovar'*, vol. 76 (St. Petersburg, 1963), pp. 694-695.
- (20) Forrest A. Miller, *Dmitrii Milutin and the Reform Era in Russia* (Charlotte, North Carolina, 1968), pp. 202-204; Tvardovskaia, op. cit., pp. 163-164.
- (21) Khristoforov, op. cit., p. 294. 竹中浩『近代ロシアへの転換——大改革時代の自由主義思想——』（東京大学出版会、一九九九年）二二三頁。
- (22) Miller, op. cit., pp. 200-201; Tvardovskaia, op. cit., p. 166.
- (23) *Ibid.*, pp. 167-168.
- (24) マンサーロンはスラヴ世界の統一をドイツの統一に対応するものとして考えていた。M. B. Petrovich, *The Emergence of Russian Pan-Slavism, 1856-1870* (New York, New York, 1956), pp. 254-255を参照。カテゴリーにおける同様の発想について、Hans Kohn, *Pan-Slavism: Its History and Ideology* (Notre Dame, Ind., 1953), p. 179を参照。
- (25) ロシア正教会の宗務院が、モスクワのスラヴ慈善委員会を支援していた（Petrovich, op. cit., p. 139）。
- (26) A. N. Pypin, *Pan-Slavism v proshlom i nastoiashchem* (Moscow, 2002), pp. 185-186.
- (27) マリン・V・ブンデフ「ブルガリアのナショナリズム」「東欧のナショナリズム 歴史と現在」（刀水書房、一九八一年）三〇七頁（森安達也『キリスト教史Ⅲ』（山川出版社、一九七八年）四二三頁）。
- (28) [Julius Wilhelm Albert von Eckardt.] *Russia before and after the War* (London, 1880), pp. 290-291.
- (29) Morozov and Sergeev, op. cit., p. 10.
- (30) Lukashovich, op. cit., p. 137.
- (31) Ambler, op. cit., p. 139. 一八七七年には『ゴロース』は部数を創刊時の四〇〇〇から三、〇〇〇に伸ばしていた（高田「露土戦争とロシア・ナショナリズム」七一四頁）。
- (32) *Russia before and after the War*, p. 292.
- (33) *Ibid.*, p. 298; Lukashovich, op. cit., pp. 135, 140; Narochnitskaia, op. cit., pp. 27-28.
- (34) Byrnes, op. cit., pp. 104-105. しかしその態度は典型的な汎スラヴ主義者とは異なり、特別な使命感によるものではない。

かった (Ibid., p. 123)。

- (35) *Russia before and after the War*, pp. 310-311.
- (36) Florinsky, op. cit., pp. 1006-1007.
- (37) チェルニャーエフやファチエーエフもセルビア人やブルガリア人に幻滅していた。以下を参照。A. S. Suvorin, *V ozhidanii nika XX: Malenkie pis'ma 1889-1903* (Moscow, 2005), p. 968; Morozov and Sergeev, op. cit., p. 10.
- (38) Kohn, op. cit., p. 218.
- (39) Lukashевич, op. cit., pp. 158, 160-161.
- (40) Byrnes, op. cit., pp. 223-224.
- (41) Florinsky, op. cit., pp. 1026-1027.
- (42) Ibid., pp. 1134-1135.
- (43) Tsimbaev, op. cit., pp. 242-243; Lukashевич, op. cit., p. 141.
- (44) 竹中浩「改革後ロシアのゼムストヴォと立憲主義——一八六五——一八八二年——」『阪大法学』第四六巻第四号（一九六六年一〇月）、五三三頁。
- (45) もともとシユヴァーロフらは代表制のアイデアをもっていた。V. G. Chernukha, *Vnutrennaja politika tsarizma s serediny 50-kh do nachala 80-kh gg. XIX v. (Leningrad, 1978)*, ch. 1, sec. 3を参照。
- (46) ただ、そのやり方は、当時の基準からしても決して文明的とはいえなかった (Florinsky, op. cit., p. 982)。
- (47) 『ゴーロス』もこの戦争を支持した (高田「露土戦争とロシア・ナショナリズム」七一四頁)。
- (48) 竹中「改革後ロシアのゼムストヴォと立憲主義」五一六頁。
- (49) カトコーフの書評は冷ややかでもある (Tvardovskaja, op. cit., p. 220)。さっではかつてのファチエーエフの過激さは影を心ざめた (Morozov and Sergeev, op. cit., p. 31)。
- (50) Lukashевич, op. cit., pp. 158-159。近しくしていたアクサーコフへの訪問の前日、一八八二年六月二十五日に、スコレーフは突然世を去った (Ibid., p. 160)。カトコーフは追悼文の中で、スコレーフが中央アジアにあって海峽問題の重要性を忘れなかったと述べ、その視野の広さを賞賛している (Katkov, *Imperija i bramola*, p. 276)。

- (51) Richard S. Wortman, *Scenarios of Powers: Myth and Ceremony in Russian Monarchy from Peter the Great to the Abdication of Nicholas II* (Princeton, New Jersey, 2006), pp. 269-270.
- (52) Katkov, *Imperia i krumola*, p. 266.
- (53) ポンドノスツェフは、ニコライ時代に入ってから、世紀末のハーグ平和会議を推進し、極東で日本との緊張を高める政策に反対した (Byrnes, op. cit., p. 131)°。
- (54) *Ibid.*, p. 130. ポンドノスツェフが主導した宗教的少数者に対する政策については、さしあたり竹中浩「帝政期におけるロシア・ナショナリズムと同化政策——沿バルト地域のロシア化を手掛かりにして——」『年報政治学一九九四』(岩波書店、一九九四年)七二—七四頁、同「近代ロシアにおけるナショナリズムと宗教政策——ロシア帝国における福音主義的セクトの問題をめぐって——」『ロシア史研究』第百六四号(一九九九年四月)九—一〇頁を参照。
- (55) スヴォーリンがカトコーフに対抗できる唯一のジャーナリストであることは衆目の一致するところであった。E. A. Dinershtein, *A. S. Suvorin: Chelovek, sdelavshii kar'eru* (Moscow, 1998), p. 126 を参照°。
- (56) Ambler, op. cit., pp. 163-165, 168.
- (57) Dinershtein, op. cit., p. 71. しかし、イグナーチエフに代わってドミトリ・トルストイが内相になったとき、彼はセムスキー・ソボルに対する支持を取り下げただけの政治的機転をもっていた。
- (58) *Ibid.*, p. 78. 一八九六年二月、スヴォーリンは作家レフ・トルストイに対して、「カトコーフとはほとんど交渉がなかったと述べている (A. S. Suvorin, *Dnevnik* (Moscow, 1999) p. 206)°。
- (59) 露土戦争のとき、既にスヴォーリンは反ユダヤ主義的な姿勢を示していた (Ambler, op. cit., p. 158)°。
- (60) 一八七八年に一五六二だった『ノヴォオエ・ヴレーミャ』の購読者数は、一九〇九年には三六、九〇〇と、実に二・三倍になった (Aleksandr Romanenko, "Neskoliko slov o zhizni i sud'be Alekseia Suvorina," in: A. S. Suvorin, *V ozhidanii neka XX: Malenkie pis'ma 1889-1903* ed. (Moscow, 2005), p. 16)°。一九〇五年革命に際し、ホーリキーはスヴォーリンを評し、「彼が典型的な保守派の言論人に比べてはるかに知的であるだけに、いっそう有害であるとしている (Ambler, op. cit., p. 10)°。
- (61) Dinershtein, op. cit., pp. 75, 84.

(62) Ibid., pp. 83; Suvoim, *V ozhidanii neka* XX, p. 449. 一八九六年二月二十九日に『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』の発行一〇周年を祝ったとき、スヴォーリンは出席していたチエルニャーエフに感謝の意を表している (Suvoim, *Dnevnik*, p. 206)。